

統合から遠ざかる欧州に必要な視点とは

在ベルギー異文化研究者
スティーブ・モリヤマ

EU では移民排斥を叫ぶ政党が勢力を伸ばしている。
グローバル化の波が高くなりすぎた反動か。

分断と不信感のはざままで

ジョン・フォン・ノイマン (コンピュータの父) など多数の天才たちの輩出国として知られるハンガリーは、中欧の中でもひととき異彩を放つ国だ。周辺国とは異質な言語をもち、風光明媚な土地で独自の文化を築いてきた。

そのハンガリーが揺れている。本年4月の選挙でオルバーン首相率いるフィデス・ハンガリー市民同盟が圧勝し、3期連続で政権を取った(通算4期目)。フィデスはもともと極右政党ではなく中道右派だが、今回の選挙でオルバーン氏が頻繁に用いたポピュリスト的メッセージに国際社会は眉をひそめた。反グローバル化(間接的にユダヤ批判)や反移民・反難民(直接的にアラブ批判)を声高に唱え、特にユダヤ系投資家のソロス氏が主導するOSF(自由主義の拡大を願うNGO)に照準を当て「わが国を移民だらけの国にし、キリスト教的価値観や国家安全保障を脅かす危険な存在」



ドナウ川とハンガリー国会議事堂 (写真: 時事)

として激しく非難した。しかも、「ソロス阻止法案」(外国人から資金提供を受けるNGOは受取額に25%税率が課される等)を通すことを公約に掲げ、「イスラム系移民の侵略者たちにわが国が乗っ取られないよう、キリスト教徒の皆様をお守りします」と繰り返した。その結果、地方住民が共鳴し今回の選挙結果につながったようだ。

欧州委員会や西側EU諸国等が非難しているのは、オルバーン氏が裁判所、メディア、大学など、本来政治と独立して運営されるべき機関を完全掌握し、独裁国家的な色彩を強めているからだ。選挙の1週間後、氏の当選や不公平な選挙制度に不満を抱く数万人による抗議デモが行われたが、中欧の小国は分断と不信感のはざままで混迷の度合いを強めている。

繰り返すグローバル化と保護主義

一方、オルバーン氏の盟友と呼ばれるのが、ポーランドのカチンスキー元首相である。彼が01年に双子の弟と創設した「法と正義」は、現在ポーランド与党で、氏は今でも党首を務めている。05年に大統領に就任し10年に飛行機墜落事故で亡くなった弟とともに「不正蓄財したオリガルヒ(新興財閥)どもを根絶する」など、ポピュリスト・フレーズを繰り返し国民の信頼を勝ち得たが、今回ソロス氏を標的にしたオルバーン氏の主張に似ている。「法と正義」はその後勢力を失い政権交代し、15年の総選挙で復活した。首相を若手に任せたカチンスキー氏はキングメーカーとしてポーランド政界に君臨している。オルバーン首相はカ